

# 俳壇 読売

## 矢島 渚男 選

鳥帰る句会のありしシベリアへ

東久留米市 飯山徳次郎

【評】シベリアへ抑留された経験が、そこでの句会で俳句を知ったのであろうか。そして辛い過去も今は懐かしいものとなって居るのだ。看板の文字の中や小鳥の巢

宝塚市 武田 優子

【評】ひろい世の中にはいろいろな事もある。小さな四十雀などに丁度いい雀が居た。何の店の看板なんだろう。見物に来る人もいて、繁盛するといひする。

西東京市 永井 康信

【評】子連れで公園へブランコに行ったら先着が居た。知らない子だけれど、良い友達になれたらいいね。人生は出会い。俳句も出会いの詩。難まつり座る文化の守りである。

佐賀市 栗林美津子

全ページ春の風がめぐりけり  
明石まで来しに鮎子入荷なし

東京都 関根ともみ

宝塚市 広田 祝世

プルームスの春愁につきあひにけり

甲府市 村田 一広

ハイタッチする子背が伸び春の風

福山市 石川 茂樹

ディケアの迎えの車屋根に雪

熊谷市 柿沼 好枝

鳥去りし北の遠山辛夷咲く

高砂市 宮田 悦子

## 高野ムツオ 選

いかやうに国はあらうと初桜

浜松市 宮田 久常

【評】世界各地で深刻な戦争が起き、日本も巻き込まれかねない現在の状況を念頭にしているのだらう。無垢清純な初桜に、どんな時でも平和を守ろうとの信念を込めた。

白木蓮開けの合図待ちにけり

さいたま市 鈴木 栄一

【評】蓄をいくつも空へ掲げた白木蓮。どれもが神の託宣を待って眠っている幼子のように見えたのだらう。目を覚ますのはもうすぐだ。亡き犬を抱きしめており春の夢

東京都 山田真理子

【評】家族の一員として慈しんだ愛犬。ふさふさした毛並みといい、温かみといい、確かに抱いたはずだったが。亡き後の切ない春の夢。すかんぼや絶交しても三日ほど

北上市 佐々木清志

日陰には日陰の力犬ふぐり  
子らと会ふ妻の手提に路の藁

神奈川県 石原美枝子

蓬摘んであしが待ち人あららしき

久喜市 深沢ふさ江

ひよここりと帰つて来さう春炬燵

青梅市 青柳 富也

春潮や教科書の荷の届ころ

津市 中山 道春

肩先に桜蔭降る離任式

福島市 引地しづい

## 正木ゆう子 選

妻死せば佃煮と飯春タマ

横浜市 栃木 安穂

【評】それだけかと、つい言葉返したくなる句だ。同様の人はせめて具沢山のお味噌汁を。大根、人参、葱、豆腐、芋、苜、若布、何でも。出汁パックで煮て、お味噌溶かすだけ。亡き人と共の余生や初椿

那珂市 綿引多美子

【評】椿が咲き始めましたよと知らず知らず話しかけている。その人が生きているときと同じように、自然に。生と死の境は有って無きやう。轉りや家電音声指示雑多

宇都宮市 熊田 靖子

【評】家電やカーナビはけっこう上から目線の言い方をする。指示というか命令というか、文句というか。人間の方が使われているような。不安などなかりし日々や桜貝

佐野市 落合 葉子

鑑賞の深みにはまる朝がすみ  
最澄の山より暮れて白木蓮

柏市 佐藤 敏文

初花の一夜は幹に咲きにけり

吹田市 前田 尚夫

寂しいと言はば崩れも春の星

東京都 望月 清彦

火を焚いて見送る港船

八王子市 梅沢 春雄

行く春や雨の江の島山二つ

日南市 宮田 隆雄

横浜市 菅沼 葉一

## 小澤 實 選

うらつかやインコの真似る着信音

横浜市 岡 まゆみ

【評】よく晴れた春の日、飼っているインコが、スマートフォンに自分が設定している着信音をそのまま真似て鳴いた。思いもよらぬその鳴き声に、感嘆しているわけだ。休職の担任も来し卒業式

小諸市 藤 雪陽

【評】卒業式には、休職中の担任の先生も出席してくれた。担任が休職してしまっていたのは、学校生活も平坦ではなかったようだ。雪洞に延長コード難まつり

所沢市 須田 菊枝

【評】難壇の最上段に置く雪洞。延長コードを付けて、ようやくコメントにつなげ、灯すことができた。延長コードというものが生きた。白神の樫の根開き聴かんとす

秋田市 松井 憲一

一掃すりして浅蜷りを黙らせる  
畑まで行きて卒業証書見す

北本市 萩原 行博

撮り鉄に踏みつぶされし露の臺

東京都 山口 照男

ひかり飛ぶ牛の涎や涅槃西風

栃木県 ありあひこ

引き続きマスク外せぬ花粉症

相模原市 芝岡 友衛

入社試験まずは笑顔のつくりかた

横浜市 池末 亮輔

土浦市 今泉 準一

## 逢って話して④

## 俳句あれこれ 佐藤文香 (俳人)

月に一回、ちょっと変わった句会をしている。その名も「悟空の会」。三橋敏雄の弟子にあたる中村裕さんと遠山陽子さん、孫若子の私という三人で二〇一四年の十一月に始めた。裕さんが亡くなられて淋しくなつたが、新たに鶴田智哉さん・福田若さんをお迎えし、二〇一八年に新体制となった。各自その月につくった二十句を配り合ひ、ほかの三人の二十句ずつからそれぞれ五句選ぶ。普通の句会であれば、誰の句かわからないように作品をランダムに並べた一覧にするが、私たちはお互いの作風がわかっているから、作家ごとに絶対評価で選句をする。自作についての確かな意見を聞くことができ、ほかの三人の最新作が読める贅沢な句会である。

へさくらさくら逢はぬ日の尾がまた伸びる 遠山陽子。悟空の会もコロナ禍ではオンラインで続けたが、私はやっぱり逢つて話すのが大好きだ。



題字デザイン・イラスト 福田美蘭